

『現代中国の生活変動』

飯田哲也 編
坪井 健



はしがき

中国にかぎらず諸外国の一般人の生活は意外と知られていないのではないだろうか。それぞれの国・社会の生活を具体的に知るということは、グローバル時代といわれている現在、外国を具体的に知るにあたってはきわめて大事なことである。とりわけ外国人との交流では生活を知ることが不可欠であろう。なぜならば、生活とは国民性あるいは民族性の現れそのものだからである。

特にアジアにおける人々の具体的な生活を知ることが、アジアの一員である日本人にとって大事である。残念ながら、私自身は中国人以外のアジア人の生活をあまり知らない。中国を知ることで精一杯だからである。アジア諸国についての「学術論文」や「実態調査報告」に若干接することはあるが、具体的な生活については寡聞にしてそのような出版物にほとんど接していない。書店に行けばわかるように、中国についての本は沢山ある。しかし、政治・経済などの「マクロな社会」についてのもの、トピック的なものが大部分であるように思われる。

そのような事情を念頭に置いて、本書では生活の基本と思われる家族・地域・教育を取り上げるとともに、それらと不可分にかかわっている生活文化と犯罪を盛り込んだが、多くの〈はしがき〉にあるような各章の内容については目次を見ればおおよそわかるので、私は〈はしがき〉では作成プロセスについて書くことにしている。すなわち、私が最近の編著でつとに強調していることを、言っておく必要があるということにはほかならない。本書は以下のような日程で企画された。

- | | |
|------------------|--------------------|
| 2005年9月 | 構成と執筆者の確定。 |
| 2005年11月 | 第1次構想レジュメ提出。 |
| 2005年11月～2006年5月 | 可能なかぎり研究会を行う。 |
| 2006年3月 | 第2次（ほぼ最終）構想レジュメ提出。 |

2006年7月	中国語の原稿締切。
2006年9月	日本語の原稿締切。
2006年10～11月	原稿の調整・修正。
2006年12月上旬	出版社へ完成原稿送付。
2007年3月	刊行。

今度の企画では、私をはじめと一緒に仕事をする人たちばかりであり、さらに日本人がわずか4人で、他は中国在住の人や翻訳者を含めてすべて中国人という執筆陣ということになったので、編著の分担執筆にあたっての留意点についてとりわけ強く要請した。

1つは、締め切りを大幅に遅れないこと。これについてはとりわけ「偉い人」や年長者に悪しき「習慣」が多いようである。すぐ後で述べるが、そのような人たちにはその影響の大きいことを考えていただきたいと思って機会ある毎に表明している。

原稿執筆の遅れや放棄についての表明として、ここで私の共編著『応用社会学のすすめ』（学文社 2000年）の「はしがき」の文の一部を再録しよう。

「私は相対的に若い世代にはそのような悪しき「習慣」を反面教師とすることが大事であること、年長者にたいしては『もしあなたが30代だったら、言い訳を並べながら原稿執筆期限を何度も延ばすであろうか』、つまり研究者にとっては『初心忘れるべからず』が必要であろうと何回も話した」

もう1つは、〈商品価値〉を考えて執筆することである。市販の専門書にはこの意識が果たしてどれだけあるであろうか。私は本書の執筆者に手紙を書いた。「私たちは読者にお金を出して本を買ってもらうのです。だからそれに見合った商品価値のある原稿であることが大事です。自費出版なら自己満足でよいし、学術雑誌の原稿ならば査読にパスすればよいし、学位請求論文もそうです。市販の本の場合は違います。水準の問題ではないことを前提に読者がわかるという親切さも大事です」

残念なことではあるが、今回はもっとも悪い例が出たのである。終章の執筆予定者は中国研究では著名な関西のK大学のX教授、私は執筆陣に加わっていたことを喜んでいて。しかし、原稿締切の1ヶ月半後の11月中頃に、夕

イムリミットが11月末というかたちで問い合わせをしたが、全く返事がなかった。「見切り発車」をした後で（12月中頃）原稿は不要であると連絡すると、「多忙で失念していました。終章は編者が書いた方がいいでしょう」というさりとした返事があった。先に書いた「偉い人」の悪習の極端な例であり、悪いことをしたという意識が全くないとしか受け止めようがないであろう。

「多忙で失念」あるいは「遅れる」ということは、他の執筆者が関心ということになるであろう。しかし、多くの研究者は複数の仕事を抱えているはずである。多忙が理由ならば、最初から執筆をことわるか、少なくとももう少し早く伝えるのが常識であろう。事実としても、これまでの私の経験では良識ある人からは最初から参加できないという返事を何人かからいただいている。このようなケースが2つの悪影響を及ぼしていることに注意をうながしたい。1つは他の執筆者にたいして迷惑をかけていることである。別の本の〈はしがき〉に書いたが、早く執筆した若い人から「半年以上も遅れている人がいて困っている」という話をしばしば耳にする、と言えはわかるであろう。

もう1つは、相対的に若い世代や大学院生・留学生への悪影響である。「偉い人」は意識していないかもしれないが、この悪習は踏襲されているのである。一般社会では許されないこの悪習を可能なかぎり少なくすることを訴えるとともに、若い世代にはこの悪習に染まらないよう心掛けていただきたい。これまでは、一般的にこの悪習について表明してきたが、日本人の多くは具体的に言わないと他人事と受け止めるようである。私はこの悪習について口ばかりでないことを自分の原稿執筆で示している。締め切り前に原稿を書き上げて執筆者全員に意見を求めるかたちで送るという行動で示すのである。他の原稿が出てから書き始める編者がいるということも耳にするが、それでは原稿催促が出版社任せになり、この悪習の解消の方へ向かわないのではないだろうか。もっともこの悪習は日本人だけではないようであり、執筆予定者だった中国社会科学院のF氏からも原稿の提出がなく「見切り発車」せざるを得なかった。テーマが「農村」なので、短期間での代役は不可能であり、これまた残念な結果になった。

ここで中国在住の中国人の執筆者を簡単に紹介しておこう。

关 颖氏は天津社会科学院研究員、家族社会学、教育社会学を専門とする中堅の社会学者で『社会学視野中的家庭教育』(2000年)などの著書、論文多数。

張 海英氏は中国航空航天大学助教授、同教育研究所副所長、教育社会学を専門とする中堅の社会学者、教育に関する論文多数。

李 强氏は、清華大学社会学部長、中国のトップクラスの社会学者である。理論社会学、階層研究、都市研究、その他の社会分野についての著書・論文多数。

若干の問題もあって編者としてはやや不満もあるが、ともあれほぼ予定通りの進行になったので、執筆した方々がこれを1つの契機としてさらに前進されることを期待したい。本書は日中社会学会の会員を軸とするものであり、中村則弘会長をはじめとする会員諸兄姉のアドヴァイスなどお世話になったことにお礼を申し上げるとともに、出版を快く引き受けていただいた相良景行氏をはじめとする時潮社の方々に感謝の意を表明し、時潮社の一層の発展を祈念するものである。

2007年1月

京都 船岡山裏手の寓居にて

飯田哲也

現代中国の生活変動／目次

はしがき(飯田 哲也).....3

序章 現代中国の国民生活(飯田 哲也).....11

——1990年代の生活変動を軸に

はじめに 11

1. 階層分化をめぐる 13

2. 変化の1つの指標としての収入と支出 18

3. もう1つの指標としての教育 26

おわりに——更なる課題を求めて 31

第1章 家族変容と家庭教育(关 穎).....34

1. 家族構成と家族関係 34

2. 家庭生活様式の変遷 44

3. 伝統的家庭教育と教育の現状、未来 50

第2章 現代中国の家族(富田 和広).....63

——自己愛家族の誕生

はじめに 63

1. 生きる場としての家族 64

2. 消費文化の高度化と自己愛家族 67

3. 子ども観の変容 71

おわりに 80

第3章 都市(李 妍姦).....86

——基層管理体制の変動とコミュニティ形成

はじめに 86

1. 「社区」と「小区」：都市部の二つの顔 87
 2. コミュニティ形成と住民自治に関する問題提起 90
 3. 小区における隣人関係の形成と自治への可能性 92
 4. 自治の習慣づくりと自治の制度づくり 99
- 終わりに 102

第4章 中国都市の貧困層問題……………(李 强)……………108

はじめに 108

1. 1990年代以後の中国の都市における貧困状況 108
2. 都市貧困層の貧困原因に関するマクロ的分析 113
3. 都市貧困層の貧困に関するミクロ的分析 121
4. 中国の都市における貧困の解決策 123

第5章 中国の大学改革の進展と大学生……………(張 海英)……………128

はじめに 128

1. 大学教育における3つの特徴 128
2. 中国における大学教育改革の推移 132
3. 階層構成の変化と大学生 140

第6章 在日中国人留学生の動向……………(坪井 健)……………151

はじめに 151

1. 中国の留学生派遣政策と日本の留学生受け入れ政策 151
2. 1980年代以降の日本留学ブーム 154
3. 中国人留学生、主流の時代へ 159
4. 90年代後半からの中国人留学生の急増の背景 160
5. 在日中国人留学生の虚像と実像 167

おわりに 171

第7章 生活と文化……………(中文 礎雄)……178

——流行り謡から見た現代中国の生活

はじめに 178

1. 流行り謡の特徴及びその歴史 179

2. 経済成長に伴うモラルの低下 188

3. 日常生活の変質 194

終わりに 201

第8章 経済改革後の農民工と犯罪……………(羅 東羅)……203

はじめに 203

1. アノミー論と中国の農民工の犯罪原因 204

2. 国家の刺激政策と国民の金銭的成功目標の肥大化 205

3. 建国後の工業化と社会構造の格差 207

4. 農民工の金銭的成功目標の制度的障害 210

5. 農民工のアノミーの深刻化 213

6. 農民工の「革新行動」 215

おわりに 220

終章 中国研究の行方……………(飯田 哲也)……223

——〈あとがき〉的提起

1. 中国研究の難しさ 223

2. 現代中国の多様性・複雑性の確認 226

3. 中国研究の方向——1つの覚え書き—— 229

カバー写真 飯田哲也

装幀 比賀祐介

序章 現代中国の国民生活

—1990年代の生活変動を軸に—

はじめに

中国社会についての出版物が多くなっているこの頃である。中国の文献からの翻訳をも含めて日本語の文献が書店のコーナーに占めるスペースが広がっている。現代中国についてのそれらの論考・紹介は大きくは3つに分けられるようである。

1つには、事実の紹介を軸とした報道に近い性格のものを挙げるができる。取り上げられている分野はきわめて多岐にわたっている。これらには現在の中国社会の特徴あるいは新たな動向について、なんらかの整序をしているという性格のものが多い。

2つには、経済や政治の動向などのマクロな紹介にとどまらず、分析・評価・予測などが論じられている。より具体的に言えば、中国の統計資料・報道（とりわけ諸会議における論議や決定）や中国で影響力があると思われる人物の言動などに依拠して、中国社会の動向と行方について、一定の評価も交えて論じる性格のものが多い。

3つには、中国の社会変動をなほほどかにおいて念頭においた中国の社会的現実の多様な研究である。社会学やそれに近い手法によるものが多い。日本人と中国人の両方の研究者によるものだが、評価を交えずに事実のみを示すものと、何らかの観点から中国社会のあり方の問題性について論じるものがある。

中国についてのこのような論考はここ20年余り続いているが、そのような状況のなかで、私は1999年に、中国研究について3つの課題を提起した。①中国全体のマクロな認識の明確化、②生活の多様性と多様な変化動向の具体的な整序、③最近の中国における多様な社会問題についての研究の積み上げ、である。

なお現時点では、中国における社会学研究の動向の新たな検討を、これらの課題との関連で進める必要があることを、理論的課題として付け加えたい¹⁾。

この論考では第1の課題に焦点を当てるが、1990年代に較って重要と考えられる変化動向を素描して、その他の課題については必要と思われるかぎりにおいて簡単に触れることになるであろう。「なぜ1990年代か」ということについては、中国の国民生活の変化にたいする私の見方による。いわゆる「改革開放」以後の変化については、様々な紹介・論考があるが、変化の見方については述べられている時期、焦点の当て方、方法の違いによって異なる。とりわけ国民生活については、「変化と残存」が錯綜しているためか、異なる論考が多様に存在している。具体的にはいわゆる70年代末の「改革開放」から変化を見る論考、80年代後半からの変化を重視する論考、90年代前半からの変化を重視する論考などを指摘することができる。私はそれらの見方を一概に否定はしないが、いささか異なる見方をしている。

国民生活に焦点を当てるならば、具体的には人々の生活の仕方（あえて生活様式という表現を避ける）や意識・態度が1990年代の前半と後半では大きく変化している、と私は見ているのである。「改革開放」から1980年代までの変化についてどのように見るかによって多分捉え方が違ってくるであろう。私が『中国放浪記』（学文社 1997年）で素描したのは主に1990年代前半であるが、後半の実態には大きく異なっている場合が多い。変化をこのように区切る見方については、以下の展開によって示されるであろう。

ただしこの章では、1990年代の中国の国民生活の変化動向を全面的に展開するのではなく、展開に必要な手がかりを具体的に鮮明にすることが狙いである。そのためにさしあたりは2つの点にしぼって取り上げる。1つは、国民生活におけるマクロな変化であり、もう1つは、その変化と関連して具体的な生活レベルでどのように現れているかに若干触れるということである。理論的意味を一言付け加えるならば、前者が国民生活の客観的条件（状態）、後者が主体的条件（活動）の部分に相当することになるが、むしろ2つの条件を全面的に触れるわけではない。展開にあたっては、私の前の論考「現代中国社会と国民生活」におけるスタンスを基本的には保持・継続することになる¹⁾。

編者紹介

飯田 哲也 (いいだ てつや)

1936年 富山県生まれ

1969年 法政大学大学院社会科学部社会学専攻博士課程満期退学

現在 文学博士

中国人民大学客員教授、中国・寧波工程学院客員教授

主な著書 『家族の社会学』(ミネルヴァ書房 1976年)『家族社会学の基本問題』(ミネルヴァ書房 1985年)『テンニース研究』(ミネルヴァ書房 1991年)『家族と家庭』(学文社 1994年)『現代日本家族論』(学文社 1996年)『中国放浪記』(学文社 1997年)『現代日本生活論』(学文社 1999年)『社会学の理論的挑戦』(学文社 2004年) 以下は(共)編著『都市化と家族の社会学』(ミネルヴァ書房 1986年)『家族政策と地域政策』(多賀出版 1999年)『応用社会学のすすめ』(学文社 2000年)『新・人間性の危機と再生』(法律文化社 2001年)『基礎社会学』講義』(学文社 2002年)『現代社会学のすすめ』(学文社 2006年)

坪井 健 (つばい つよし)

1947年 岡山市生まれ

1978年 東洋大学大学院社会学部社会学専攻博士課程満期退学

現在 駒澤大学文学部教授(社会学・社会心理学担当)

主な業績 『国際化時代の日本の学生』(学文社 1994年) 以下は共著『新版統計からみる社会学』(学文社 1984年)『日本人と社会変動』(人間の科学社 1995年)『学生の国際交流とアジア学生文化の比較研究』(代表、坪井健 平成6年度科研費研究報告書 1995年)『日本人と国際化』(人間の科学社 1999年)『日本人と高齢化』(人間の科学社 2001年)『21世紀の国際知的交流と日本』(中央公論新社 2002年)『日本人と少子化』(人間の科学社 2004年)『アジア太平洋諸国の留学生受け入れ政策と中国の動向』(代表、横田雅弘 平成17年度科研費研究報告書 2005年)『岐路に立つ日本の大学』(代表、横田雅弘 平成18年度科研費研究報告書 2006年)

執筆者一覧（執筆順）

飯田 哲也（いいだ てつや）	中国人民大学客員教授	序章 第5章翻訳 終章
关 颖（クワン イン）	中国・天津社会科学院研究員	第1章
富田 和広（とみた かずひろ）	県立広島大学助教授	第2章
李 妍姝（り けんえん）	駒沢大学助教授	第3章
李 强（リ チャン）	中国清華大学教授	第4章
張 海英（チャン ハイイン）	中国航空航天大学助教授	第5章
坪井 健（つばい つよし）	駒沢大学教授	第6章
中文 健雄（なかふみ そゆう）	立命館大学教授	第7章
羅 東耀（ら とうよう）	奈良大学教授	第8章 第4章翻訳
陳 鳳（ちん ほう）	姫路獨協大学非常勤講師	第3章翻訳

日本在住の中国人は「日本語読み」、中国在住の中国人は「中国読み」にしました。

現代中国の生活変動

2007年4月15日 第1版第1刷

定 価=2500円+税

編 者 飯田 哲也・坪井 健 ©

発行人 相 良 景 行

発行所 尚 時 潮 社

174-0063 東京都板橋区前野町4-62-15

電 話 (03) 5915-9046

F A X (03) 5970-4030

郵便振替 00190-7-741179 尚潮社

URL <http://www.jichosha.jp>

E-mail kikaku@jichosha.jp

印刷所 相良整版印刷 製本所 的武蔵製本

乱丁本・落丁本はお取り替えます。

ISBN978-4-7888-0616-0